日本語の同語反復述語文の意味と特性

言語学・応用言語学専攻
平成 18 年入学
1LT06109E　　西山なつ紀

2010（平成 21)年 1 月提出

要 旨

本論文では、「V ことは V（が～）」、「V には V（が～）」のような表現（以下、**同語反復述語文**）にはどのような特性があるのかということについて調べ、(i)「V しようとしたが V そのものに問題が生じている」という場合と、(ii)「V したが V のあとの結果に問題が生じている」という場合とがあるということを示した。(ii)の意味を表す同語反復述語文には、さらに「V しようとしたが程度が低い」という意味を表すものと、それ以外の意味を表すものがある。一方、(i)の意味を表す同語反復述語文の場合、V であること（もしくは V が起こったこと）を強調した上で、別の問題が生じていることを表している文であるということを述べた。

さらに、これらの意味の違いと動詞の意味分類との間に相関がないかどうかを調べ、第一種「状態動詞」・第二種「継続動詞」・第四種の動詞が 1 つの V につき(i)と(ii)の 2 種類の意味を表すことができたのに対して、第三種「瞬間動詞」は 1 つの V につき(ii)という意味しか表さないことが明らかになった。

また、「V ことは V（が～）」と「V には V（が～）」には大きな意味の違いがないように見えるが、「（家が）燃える」・「（事故に）遭う」など、あまり望ましくない V の場合、「V には V（が～）」は「V ことは V（が～）」に比べて、「わざと V した」「V することを望んでいる」という意味を表す傾向があるということも指摘した。

目 次

1. はじめに

日本語には、以下のように、述語部分を繰り返す表現がある。

(1) a. 雨が止んだことは止んだが、地面が濡れていてグラウンドが使えない。
b. 雨が止むには止んだが、地面が濡れていてグラウンドが使えない。

(1a,b)でみられる「V ことは V（が～）」「V には V（が～）」のような表現を、本論では**同語反復述語文**と呼ぶ。

同語反復述語文は、動詞部分を反復させない通常の述語文とその解釈で違いが見られる。

(2) a. ジョンの家は燃えたことは燃えたが、幸い火元の台所が燃えただけで済んだ。
b. ジョンの家は燃えたが、幸い火元の台所が燃えただけで済んだ。

(3) a. ジョンの家は燃えたことは燃えたが、ジョンは貯金があったのですぐに新居を購入した。
b. ジョンの家は燃えたが、ジョンは貯金があったのですぐに新居を購入した。

(2a)では、述語単独の文(2b)に比べ、「V しようとしたが V そのものに問題が生じている」という含意が感じられる。また(3a)では、述語単独の文(3b)と比べ、「V したが V のあとの結果に問題が生じている」という含意が感じられる[1]。本論ではこのような同語反復述語文を考察していく。

本論文の構成は以下の通りである。次章では同語反復述語文が 2 種類の解釈を持つことがあることついて考察する。続く三章では金田一(1950)の日本語動詞の 4 分類に基づき、V によって同語反復述語文の解釈がどのように変わるかを調べる。四章では「V ことは V(が～)」と「V には V(が～)」の違いについて明らかにする。また、五章では動詞以外に V になりうるものについても触れる。

---

[1] ここでの「問題」とは、V することによって当然起こると予想される現象とは別の現象のことを表している。そのため、必ずしも「問題」が常に、行為者などの人物にとって悪いことや不都合なことを表すとは限らない。

2. 同語反復述語文の２種類の解釈

2.1. 「V そのものの問題」と「V のあとの問題」

同語反復述語文「V ことは V（が〜）」には、同じ V につき２種類の意味を持たせることができる V がある。1 つは「V そのものに問題が生じている」という意味、もう 1 つは「V のあとに問題が生じている」という意味である。(4),(5),(6),(7),(8)ではれぞれ、a 文が「V そのものに問題が生じている」解釈、b 文が「V のあとに問題が生じている」解釈である。

(4) a. 花子はピアノが弾けることは弾けるが、人に教えられるほどではない。
　　b. 花子はピアノが弾けることは弾けるが、ギターは弾けない。

(4a)では花子がピアノを弾ける能力の程度が低い、つまり弾けることそのものに問題ガあるといっている。それに対して(4b)は、花子がピアノをある程度弾けるがギターは弾けないという、弾くこととは別の問題が生じていることを表している。

(5) a. 父親は煙草を吸うことは吸うが、ヘビースモーカーと呼ばれるほどではない。
　　b. 父親は煙草を吸うことは吸うが、不思議なことに体は健康である。

(5a)では、父親が煙草を吸う量や頻度はヘビースモーカーといわれる人よりも少ないつまり吸うことそのものに問題があるといっている。それに対して(5b)は煙草を吸う量や頻度がある程度多いが体は健康であるという、吸うこととは別の問題が生じていることを表している。

(6) a. 満足に食事ができる生活なんてありふれていることはありふれているが、給料日前だけはそうはいかない。
　　b. 満足に食事ができる生活なんてありふれていることはありふれているが、このようなときこそ感謝の気持ちを持たねばならない。

(6a)では満足に食事ができる生活が常にありふれているというわけではない、つまりありふれていることそのものに問題があるといっている。それ対して(6b)は「満足に食事ができる生活」がある程度ありふれているが、「このようなときこそ感謝の気持ちを持たねばならない」という、ありふれていることとは別の問題が生じていることを表している。

(7) a. 新商品の発表会でプロジェクターを使えたことは使えたが、発表中に何度も誤作動を起こしてしまった。

b. 新商品の発表会でプロジェクターを使えたことは使えたが、肝心の内容がいまいちだった。

(7a)ではプロジェクターをうまく使えなかった、つまり使えたことそのものに問題があるといっているのに対して、(7b)ではある程度プロジェクターを使えたが、肝心の内容がいまいちであるという、使えたこととは別の問題が生じていることを表している。

(8) a. 太郎は車に乗ることは乗るが、雨の日しか車を使わない。

b. 太郎は車に乗ることは乗るが、運転技術は上達しない。

(8a)では太郎が常に車に乗っているわけではない、つまり乗ることそのものに問題があるといっている。それに対して、(8b)では太郎がある程度日常的に車に乗っているが、運転技術が上達しないという、乗ることとは別の問題が生じていることを表している。

以上のように、同語反復述語文の「V ことは V(が〜)」には、以下のように２種類の意味を持つ。

(9) 同語反復述語文の解釈（暫定版）

a. V そのものに問題が生じている

b. V のあとに問題が生じている

V であることを強調した上で別の問題が生じていることを表す。

2.2.「V そのものの問題」について

「V そのものに問題が生じている」解釈が取れる文に注目すると、「V しようとしたが程度が低い」という意味を表すものと、それ以外の意味を表すものがあることがわかる。

(10) 「V しようとしたが程度が低い」の意味を表すもの

a. 花子はピアノが弾けることは弾けるが、人に教えられるほどではない。

b. 父親は煙草を吸うことは吸うが、ヘビースモーカーと呼ばれるほどではない。

c. 新商品の発表会でうまくプロジェクターを使えたことは使えたが、発表中に何度も取扱説明書を見なければならなかった。

(11) 「V しようとしたが程度が低い」という意味ではないもの

a. 満足に食事ができる生活なんてありふれていることはありふれているが、給

料日前だけはそうはいかない。

b. 太郎は車に乗ることは乗るが、雨の日しか車を使わない。

(11a)では「満足に食事ができる生活がいつもありふれているというわけではない」ということを表している。また、(11b)は「太郎は車に乗るが乗る頻度が低い」ということを表している。

このように「V そのものに問題が生じている」場合でも、「V しようとしたが程度が低い」以外の解釈もありうるのである。

2.3. まとめ

(12) 同語反復述語文の解釈

a. V そのものに問題が生じている
   - i. V しようとしたが程度が低い
   - ii. それ以外

b. V のあとに問題が生じている

3. 語彙的アスペクトによる動詞分類

前節では同語反復述語文に大きく二種類の解釈があることを見てきた。しかしこの二種類の解釈は、いかなる述語に対しても可能というわけではない。

(13) a. 雨が降っていることは降っているが、少しも暑さがやわらがない。
b. 雨が降っていることは降っているが、小降りで傘をささずにすみそうだ。
(14) a. 雨が止んだことは止んだが、地面が濡れていてグラウンドが使えない。
b. ??雨が止んだことは止んだが、まだ少し霧雨が降っている。

(13)では(13b)のように「V そのものに問題が生じている」の解釈は可能であるが、(14)では(14b)のような「V そのものに問題が生じている」の解釈は容認できない。

このように同語反復述語文には、「V そのものに問題が生じている」という意味を持つものとそうでないものがある。ではどういう述語を反復させると「V そのものに問題が生じている」という解釈になれないのだろうか。この解釈ができない例を追加する。

(15) a. 彼は死んだことは死んだが、彼の音楽を愛するファンの中で生き続けている。
b. ??彼は死んだことは死んだが、まだ心臓が動いている。

(14),(15)の述語の意味に着目すると、「止んだ」「死んだ」と語彙的なアスペクトとして継続を表せないものであるように見受けられる。そこで本章では、語彙的アスペクトの観点で動詞の分類を行っている金田一(1950)の日本語動詞の 4 分類を用い、同語反復述語文において「V そのものに問題が生じている」という意味ができない要因を探っていく。

3.1. 金田一(1950)の日本語動詞の 4 分類

金田一(1950)は、日本語の動詞を、「ている」形の可否、ならびにその解釈に基づき、４つに分類をしている。以下で整理する[2]。

(16) 第一種「状態動詞」
時間の観念を超越して本来的に状態を表す動詞で、「ている」が付かない。
「*あっている、*英語ができている」などは不成立。

---

[2] 金田一(1950)の動詞の分類については影山(1993,1996)にも解説がある。本論では、影山(.1996: p.46)も踏まえてまとめている。

[例]　（机が）ある、（英語が）できる、（このナイフはよく）切れる、（注目に）値する、（三時間を）要する

(17)　第二種「継続動詞」

ある時間内続いて行われるような動作・作用を表し、「ている」が付くと動作が進行中であることを意味する。例えば「読んでいる、燃えている」は「～している最中」を意味する。

[例]　読む、書く、笑う、なく、喋る、歌う、見る、聞く、飲む、押す、歩く、働く、考える、拭く、燃える、(雨が)降る

(18)　第三種「瞬間動詞」

瞬間に終わってしまうような動作・作用を表し、「ている」が付くとその動作・作用の結果の残存を意味する。例えば「死んでいる」は死んでしまった状態、「知っている」は知ったあと、現在その知識を持っている状態を、それぞれ意味する。

[例]　結婚する、卒業する、死ぬ、(電灯が)つく、消える、さわる、届く、決まる、見つかる、(目が)覚める、出発する、到着する、(雨が)止む、忘れる、失う、知る、分かる

(19)　第四種の動詞

いつも「～ている」の形で用いられ、ある状態を帯びていることを表す。

[例] (山が)そびえる、優れる、富む、似る、ずば抜ける、ありふれる、ばかげる、坊ちゃん坊ちゃんする

以下、上の動詞のタイプごとに、順次、同語反復述語文の解釈を見ていくことにする。

3.2. 第一種「状態動詞」の同語反復述語文

まず、第一種「状態動詞」の同語反復述語文からみていこう。以下の例はそれぞれ、a の文が「V そのものに問題が生じている」解釈を示すもの、b の文が「V のあとに問題が生じている」解釈を持つものである。

(20)　「ある」

a.　私の部屋には机が<u>あることはあるが</u>、数が足りない。

b.　私の部屋には机が<u>あることはあるが</u>、その机は古くて汚い。

(20a)では「部屋に机がある」と言うにはその机の数が少ないと言っている。これは「あ

る」が「V そのものに問題が生じている」解釈を取りうることを示している。それに対し(20b)は部屋には十分に机があるという事実を強調した上で、その机が古くて汚いという新たな別の問題が生じていることを表している。すなわち「V のあとに問題が生じている」解釈である。

(21)　「できる」

a.　太郎は英語ができることはできるが、留学できるほどではない。

b.　太郎は英語ができることはできるが、英語を生かす仕事につかない。

(21a)では太郎が留学できるほどまでは英語ができないと言っている。これは「できる」が「V そのものに問題が生じている」解釈を取りうることを示している。それに対し(21b)では太郎がある程度英語ができるという事実を強調した上で、仕事で英語を生かしていないのだという問題が生じていることを表している。すなわち「V のあとに問題が生じている」解釈である。

(22)　「切れる」

a.　父のナイフはよく切れることはよく切れるが、ダイヤモンドは切れない。

b.　父のナイフはよく切れることはよく切れるが、持ち手が短くて使いにくい。

(22a)では父のナイフがダイヤモンドを切断するほどまでは切れないと言っている。これは「切れる」が「V そのものに問題が生じている」解釈を取りうることを示している。それに対し(22b)ではナイフが十分によく切れるという事実を強調した上で、「持ち手が短くて使いにくい」という新たな別の問題が生じていることを表している。すなわち「V のあとに問題が生じている」解釈である。

(23)　「値する」

a.　芸能ニュースは注目に値することは値するが、今日は政治のニュースの方をより詳しく報道すべきだ。

b.　芸能ニュースは注目に値することは値するが、芸能ニュースはデマが多いから気をつけなくてはならない。

(23a)では今日の芸能ニュースは政治のニュースほどは注目に値しないと言っている。これは「値する」が「V そのものに問題が生じている」解釈を取りうることを示している。それに対し(23b)では芸能ニュースは十分注目に値するという事実を強調した上で、「芸能ニュースはデマが多い」という問題が生じていることを表している。すなわち「V のあとに問題が生じている」解釈である。

(24)　「要する」

a.　地球の環境問題を解決することは、時間を要することは要するが、私たちの努力しだいで遅くも早くもできるのだ。

b.　地球の環境問題を解決することは、時間を要することは要するが、必ず達成しなくてはならない。

(24a)では、私たちの努力次第で、必ずしも地球の環境問題を解決するのに時間を要するとは限らないと言っている。これは「要する」が「V そのものに問題が生じている」解釈を取りうることを示している。それに対し(24b)では地球の環境問題を解決するためにある程度の時間を要するということがわかる。(24b)では、解決には時間を要するという事実を強調した上で、「(それでも)必ず達成しなくてはならない」という「V することによって当然起こると予想される現象とは別の現象(＝問題)」が生じていることを表している。つまり、ある程度の時間を要するということは、途中で諦めてしまったりすることが考えられるが、これに反して「それでも必ず達成しなければならない」という思いがあるということを言っているのである。すなわち「V のあとに問題が生じている」解釈である。

　このように、第一種「状態動詞」の同語反復述語文は、「V そのものに問題が生じている」解釈が可能である。このことを、以下でまとめておく。

(25)　「状態動詞」の同語反復述語文の解釈

同じ V について「V そのものに問題が生じているもの」と「V のあとに問題が生じているもの」の 2 種類の意味を表すことができる。なお、「V そのものに問題が生じているもの」については多くの場合「V しようとしたが程度が低い」に分類される。

3.3. 第二種「継続動詞」の同語反復述語文

　(26),(27),(28)はそれぞれ、a 文が V そのものに問題が生じているもの、b 文が V のあとに問題が生じているものである。

(26)　「読む」

a.　太郎は朝刊を読んだことは読んだが、テレビ欄しか読んでいない。

b.　太郎は朝刊を読んだことは読んだが、夕方にはその内容を忘れてしまっていた。

(26a)では太郎はテレビ欄しか朝刊を読んでいないと言っている。これは「読む」が「V そ

のものに問題が生じている」解釈を取りうることを示している。それに対し(26b)では太郎がある程度朝刊を読んだことがわかる。(26b)では、太郎が朝刊を読んだという事実を強調した上で「夕方にはその内容を忘れてしまっていた」という問題が生じていることを表している。すなわち「V のあとに問題が生じている」解釈である。

(27)　「考える」

a.　花子は自分の将来のことを考えたことは考えたが、あまり深く考えなかった。

b.　花子は自分の将来のことを考えたことは考えたが、今が楽しければそれでいいという精神を曲げなかった。

(27a)では花子があまりしっかり考えていないと言っている。これは「考える」が「V そのものに問題が生じている」解釈を取りうることを示している。それに対し(27b)は花子が自分の将来についてしっかり考えたことがわかる。(27b)では、花子が自分の将来のことを考えたという事実を強調した上で「今が楽しければそれでいいという精神を曲げなかった」という別の問題が生じていることを表している。すなわち「V のあとに問題が生じている」解釈である。

(28)　「燃える」

a.　ジョンの家は燃えたことは燃えたが、幸い火元の台所が燃えただけで済んだ。

b.　ジョンの家は燃えたことは燃えたが、（ジョンは）貯金があったのですぐに新居を購入した。

(28a)ではジョンの家は火元の台所以外は燃えていないと言っている。これは「燃える」が「V そのものに問題が生じている」解釈を取りうることを示している。それに対し(28b)ではジョンの家がある程度燃えて失われたということがわかる。(28b)では、ジョンの家が燃えたという事実を強調した上で、「(ジョンが)新居を購入した」という「V することによって当然起こると予想される現象とは別の現象(＝問題)」が生じていることを表している。つまり、家が燃えてしまうことによって住むところがなくなるということが考えられるが、これに反して「すぐに新居を購入した」ということである。すなわち「V のあとに問題が生じている」解釈である。

(29)　「押す」

a.　太郎はエレベーターのボタンを押したことは押したが、きちんと押せていなかったようだ。

b.　太郎はエレベーターのボタンを押したことは押したが、エレベーターが来ないので階段を使った。

(29a)では太郎がエレベーターのボタンをきちんと押さなかったと言っている。これは「押す」が「V そのものに問題が生じている」解釈を取りうることを示している。それに対し(29b)では太郎がきちんとボタンを押したということがわかる。(29b)では、太郎がエレベーターのボタンを押したという事実を強調した上で、「エレベーターが来ない」という問題が生じていることを表している。すなわち「V のあとに問題が生じている」解釈である。

(30)　「歩く」

a. 赤ちゃんは床の上を歩いたことは歩いたが、1、2 歩進んで転んでしまった。

b. 赤ちゃんは床の上を歩いたことは歩いたが、その瞬間を両親は見逃してしまった。

(30a)では赤ちゃんが 1、2 歩しか歩かなかったと言っている。これは「歩く」が「V そのものに問題が生じている」解釈を取りうることを示している。それに対し(30b)ではある程度の距離を歩いたということがわかる。(30b)では、赤ちゃんが歩いたという事実を強調した上で、「その瞬間を両親は見逃してしまった」という問題が生じていることを表している。すなわち「V のあとに問題が生じている」解釈である。

(31)　「働く」

a. 花子は本屋で働いていることは働いているが、働いているのか遊んでいるのかわからない。

b. 花子は本屋で働いていることは働いているが、がんばっても貯金はなかなか増えない。

(31a)では花子がまじめに働いていないと言っている。これは「働く」が「V そのものに問題が生じている」解釈を取りうることを示している。それに対し(31b)では花子がある程度まじめに働いていることがわかる。(31b)では、花子が働いているという事実を強調した上で、「がんばっても貯金はなかなか増えない」という問題が生じていることを表している。すなわち「V のあとに問題が生じている」解釈である。

以上の例から、第二種「継続動詞」の同語反復述語文について言えることは次の点である。

(32)　「継続動詞」の同語反復述語文の解釈

同じ V について「V そのものに問題が生じているもの」と「V のあとに問題が生じているもの」の 2 種類の意味を表すことができる。なお、「V そのも

のに問題が生じているもの」については「V しようとしたが程度が低い」という意味を表すものとそれ以外の意味を表すものがある。

3.4. 第三種「瞬間動詞」の同語反復述語文

(33)　「結婚する」

メアリーは結婚したことは結婚したが、わずか３ヶ月で離婚することになった。

(33)は、メアリーが結婚したという事実を強調した上で「(メアリーが)わずか３ヶ月で離婚することになった」という問題が生じていることを表している。すなわち「V のあとに問題が生じている」解釈である。

(34)　「出発する」

太郎は山口へ出発したことは出発したが、財布を家に置き忘れていた。

(34)は、太郎は山口へ出発したという事実を強調した上で「(太郎が)財布を家に置き忘れていた」という問題が生じていることを表している。すなわち「V のあとに問題が生じている」解釈である。

(35)　「失う」

花子はちょっと見ないあいだに若さを失ったことは失ったが、人生の酸いも甘いも噛み分けた穏やかな表情をしていた。

(35)は、花子が若さを失ったという事実を強調した上で「(花子が)人生の酸いも甘いも噛み分けた穏やかな表情をしていた」という「V することによって当然起こると予想される現象とは別の現象(＝問題)」が生じていることを表している。すなわち「V のあとに問題が生じている」解釈である。つまり、若さを失ったということはあまり良くないことのような印象を受けるが、それに反して「人生の酸いも甘いも噛み分けた穏やかな表情をしていた」ということを言っているのである。

(36)　「止む」

雨が止んだことは止んだが、地面が濡れていてグラウンドが使えない。

(36)は「雨が止んだ」という事実を強調した上で「地面が濡れていてグラウンドが使えない」という問題が生じていることを表している。すなわち「V のあとに問題が生じて

いる」解釈である。

(37)　「死ぬ」

彼は死んだことは死んだが、彼の音楽を愛するファンの中で生き続けている。

(37)は、彼が死んでしまったという事実を強調した上で「(彼が)彼の音楽を愛するファンの中で生き続けている」という「V することによって当然起こると予想される現象とは別の現象(＝問題)」が生じていることを表している。すなわち「V のあとに問題が生じている」解釈である。つまり、彼が死んだということは、いつか忘れ去られるのではないかということが考えられるが、それに反して「彼の音楽を愛するファンの中で生き続けている」ということを言っているのである。

(38)　「届く」

太郎は戸棚の上にまで手が届くことは届くが、自分からあまり掃除をしようとしない。

(38)は、太郎が戸棚の上にまで手が届くという事実を強調した上で「(太郎が)自分からあまり掃除をしようとしない」という問題が生じていることを表している。すなわち「V のあとに問題が生じている」解釈である。

以上の例から、第三種「瞬間動詞」の同語反復述語文について言えることは次の点である。

(39)　「瞬間動詞」の同語反復述語文の解釈

「V のあとに問題が生じている」というただ一つの意味を表し、「V そのものに問題が生じているもの」の意味を持たない。

これは、第三種「瞬間動詞」は瞬間に終わってしまう動作・作用を表すことから、「V そのものに問題がある」文の V となるには不適切であるためであると考えられる。

3.5. 第四種の動詞の同語反復述語文

(40),(41),(42)はそれぞれ、a 文が V そのものに問題が生じているもの、b 文が V のあとに問題が生じているものである。

(40)　「そびえている」

a.　たいていの公園には石碑がそびえていることはそびえているが、先日石碑の

ない公園を見つけた。

b. たいていの公園には石碑がそびえていることはそびえているが、古ぼけていて誰も気に留めない。

(40a)は石碑がそびえていない公園もあると言っている。これは「そびえる」が「V そのものに問題が生じている」解釈を取りうることを示している。それに対し(40b)では「たいていの公園には石碑がある」と言っていることがわかる。(40b)では公園には石碑がそびえているという事実を強調した上で、その石碑が「古ぼけていて誰も気に留めない」という問題が生じていることを表している。すなわち「V のあとに問題が生じている」解釈である。

(41) 「似ている」

a. 花子は太郎に似ていることは似ているが、二人を見間違えるほどではない。

b. 花子は太郎に似ていることは似ているが、花子はそれを心外に感じている。

(41a)では花子と太郎があまり似ていないと言っている。これは「似る」が「V そのものに問題が生じている」解釈を取りうることを示している。それに対し(41)b ではある程度二人が似ていることがわかる。(41b)では、花子が太郎に似ているという事実を強調した上で、「花子はそれを心外に感じている」という問題が生じていることを表している。すなわち「V のあとに問題が生じている」解釈である。

(42) 「ばかげている」

a. 勉強嫌いの太郎が総理大臣になるなんてばかげていることはばかげているが、太郎の才能を見ていると、あながち不可能ではないらしい。

b. 勉強嫌いの太郎が総理大臣になるなんてばかげていることはばかげているが、もし太郎が総理大臣にでもなったら天国のお母さんは喜ぶだろう。

(42a)では「太郎が総理大臣になる」ということが、必ずしもばかげていないと言っている。これは「ばかげる」が「V そのものに問題が生じている」解釈を取りうることを示している。それに対し(42b)では「太郎が総理大臣になる」ということが不可能に近いため、ある程度ばかげているということがわかる。(42b)では「(勉強嫌いの太郎が総理大臣になるということが)ばかげている」という事実を強調した上で、「もし太郎が総理大臣にでもなったら天国のお母さんは喜ぶだろう」という「V することによって当然起こると予想される現象とは別の現象(＝問題)」が生じていることを表している。すなわち「V のあとに問題が生じている」解釈である。つまり、太郎が総理大臣になるということがばかげたことならば、初めから太郎は総理大臣に挑戦しようとさえしないのでは

ないかと考えられるが、それに反して「(太郎が総理大臣になったら)天国のお母さんは喜ぶだろう」ということを言っているのである。

(43)　「ありふれている」

a. 満足に食事ができる生活なんてありふれていることはありふれているが、給料日前だけはそうはいかない。

b. 満足に食事ができる生活なんてありふれていることはありふれているが、このようなときこそ感謝の気持ちを持たねばならない。

(43a)では「満足に食事ができる生活」が常にありふれているというわけではないと言っている。これは「ありふれる」が「V そのものに問題が生じている」解釈を取りうることを示している。それに対し(43b)では「満足に食事ができる生活」がある程度常にありふれているということがわかる。(43b)は、満足に食事ができる生活がありふれているという事実を強調した上で、「このようなときこそ感謝の気持ちを持たねばならない」という「V することによって当然起こると予想される現象とは別の現象(＝問題)」が生じていることを表している。すなわち「V のあとに問題が生じている」解釈である。つまり、満足に食事ができる生活がありふれているということは、食事ができて当たり前なのでわざわざ感謝しなくなるのではないかと考えられるが、それに反して「このようなときこそ感謝の気持ちを持たねばならない」と言っているのである。

以上の例から、第四種の動詞の同語反復述語文について言えることは次の通りである。

(44)　「第四種の動詞」の同語反復述語文の解釈

同じ V について「V そのものに問題が生じているもの」と「V のあとに問題が生じているもの」の 2 種類の意味を表すことができる。なお「V そのものに問題が生じているもの」については「V しようとしたが程度が低い」という意味を表すものとそれ以外の意味を表すものがある。

3.6. まとめ

これまでの動詞の 4 分類の同語反復述語文の記述についてまとめると、同じ V について「V そのものに問題が生じているもの」と「V のあとに問題が生じているもの」の 2 種類の意味を表すことができる動詞は、第一種「状態動詞」、第二種「継続動詞」、第四の動詞である。また、第三種「瞬間動詞」に限っては「V のあとに問題が生じている」という意味しか表せないことがわかった。

4. 「V ことは V（が～）」と「V には V（が～）」

これまで、日本語の同語反復述語文のうち、「V ことは V（が～）」について例文を見てきた。同語反復述語文には他にも「V には V（が～）」という形式のものもある。

(45) a. 父親は煙草を吸うことは吸うが、ヘビースモーカーと呼ばれるほどではない。
b. 父親は煙草を吸うには吸うが、ヘビースモーカーと呼ばれるほどではない。

本節では、「V には V（が～）」が「V ことは V（が～）」とどう異なるかについて、考察していく。

さて(45)の例を見ると、(45a)の「V ことは V（が～）」も、(45b)の「V には V（が～）」も、共に「タバコを頻繁に吸う程ではない」という意味をしている点で、特に意味の違いがないように思われる。しかし、両者で意味の違いが現れる場合がある。

(46) a. ジョンの家は燃えたことは燃えたが、幸い火元の台所が燃えただけで済んだ。
b. ジョンの家は燃えるには燃えたが、幸い火元の台所が燃えただけで済んだ。
(47) a. 太郎は事故に遭ったことは遭ったが、怪我もなく元気である。
b. 太郎は事故に遭うには遭ったが、怪我もなく元気である。

(46a)と比べ、(46b)は「ジョンの家が燃えることを望んでいて、それが思っていた程度でなかった」といったような含意を感じる。また(47b)も、(47a)と比べ、「太郎が怪我をするためにわざと事故に遭った思った程でなかった」という感じを受ける。さらに類例を挙げる。

(48) a. 花子はちょっと見ないあいだに若さを失ったことは失ったが、人生の酸いも甘いも噛み分けた穏やかな表情をしていた。
b. 花子はちょっと見ないあいだに若さを失うには失ったが、人生の酸いも甘いも噛み分けた穏やかな表情をしていた。
(49) a. メアリーのパソコンは壊れたことは壊れたが、ディスプレイが壊れただけで本体は作動している。
b. メアリーのパソコンは壊れるには壊れたが、ディスプレイが壊れただけで本体は作動している。

このように見ていくと、「V には V（が～）」は、V に「（家が）燃える」、「（事

故に）遭う」などあまり望ましくない事態が来たとき、「V ことは V（が～）」との間に意味の違いが現れる。またこの時の「V には V（が～）」は、「わざと V した」「V することを望んでいる」という含意が生じる傾向がある。

5. 動詞以外の同語反復述語文

これまで動詞を同語反復した述語文を見てきたが、最後に、形容詞・形容動詞を同語反復した述語文について考察していく。

5.1. 形容詞の同語反復述語文

(50),(51),(52)は V が形容詞となっている文である。それぞれ a 文が「V そのものに問題が生じているもの」、b 文が「V のあとに問題が生じているもの」である。

(50) a. 花子は美しいことは美しいが、テレビに出るほどではない。
　　 b. 花子は美しいことは美しいが、性格はとても頑固だ。

(50a)では花子がテレビに出るほど容姿が美しくないと言っているのに対して、(50b)ではある程度花子の容姿が美しいということがわかる。(50b)では花子が美しいという事実を強調した上で、「性格はとても頑固だ」という「V することによって当然起こると予想される現象とは別の現象(＝問題)」が生じていることを表している。

(51) a. ジョンは試験に落ちて悲しかったことは悲しかったが、だめもとだったためあまり悲しまなかった。
　　 b. ジョンは試験に落ちて悲しかったことは悲しかったが、すぐに気持ちを切り替えて次の試験の準備を始めた。

(51a)ではジョンが試験に落ちてもあまり悲しんでいないと言っているのに対して、(51b)ではジョンがある程度悲しんでいることがわかる。(51b)では、ジョンが悲しかったという事実を強調した上で、「すぐに気持ちを切り替えて次の試験の準備を始めた。」という「V することによって当然起こると予想される現象とは別の現象(＝問題)」が生じていることを表している。

(52) a. メアリーは体が柔らかいことは柔らかいが、かばんの中に入ることはできない。
　　 b. メアリーは体が柔らかいことは柔らかいが、バレエは得意ではない。

(52a)ではメアリーはかばんに入ることができるほど体が柔らかくないと言っているのに対して、(52b)ではメアリーはある程度体が柔らかいということがわかる。(52b)では、

メアリーは体が柔らかいという事実を強調した上で、「バレエは得意ではない」という問題が生じていることを表している。

5.2. 形容動詞の同語反復述語文

(53),(54)は V が形容動詞となっている文である。それぞれ a 文が「V そのものに問題が生じているもの」、b 文が「V のあとに問題が生じているもの」である。

(53) a. 油山からの夜景はきれいだったことはきれいだったが、メアリーの美貌ほどではなかった。
b. 油山からの夜景はきれいだったことはきれいだったが、メアリーはお腹が痛くてそれどころではなかった。

(53a)では油山の夜景がメアリーの美貌よりもきれいではなかったと言っているのに対して、(53b)では油山の夜景がある程度きれいだったということがわかる。(53b)では、油山の夜景がきれいだったという事実を強調した上で、「メアリーはお腹が痛くてそれどころではなかった」という問題が生じていることを表している。

(54) a. 太郎の病室は静かなことは静かだが、選挙カーが通るたびに太郎はびっくりして飛び起きる。
b. 太郎の病室は静かなことは静かだが、それでも太郎は眠れない。

(54a)では太郎の病室があまり静かでないと言っているのに対して、(54b)では太郎の病室がある程度静かであることがわかる。(54b)では、太郎の病室が静かであるという事実を強調した上で、「それでも太郎は眠れない」という問題が生じていることを表している。

(55) a. 花子は太郎が嫌いなことは嫌いだが、だんだんと打ち解けてきたようだ。
b. 花子は太郎が嫌いなことは嫌いだが、太郎の愛犬をとてもかわいがっている。

(55a)では花子が太郎をあまり嫌っていないと言っているのに対して、(55b)では花子がある程度太郎を嫌っていることがわかる。(55b)では、花子が太郎を嫌いであるという事実を強調した上で、「太郎の愛犬をとてもかわいがっている」という「V することによって当然起こると予想される現象とは別の現象(＝問題)」が生じていることを表している。

以上の例文から、動詞に限らず形容詞や形容動詞でも同語反復述語文の V になれるということがわかった。また、V が形容詞や形容動詞であるとき、同じ V について「V

そのものに問題が生じているもの」と「V のあとに問題が生じているもの」の 2 種類の意味を表すことも明らかになった。

6. まとめ

本稿では、「V ことは V（が～）」「V には V（が～）」のような、同語反復述語文の特性がについて考察した。

まず 2 章で、「V ことは V（が～）」が、(i)「V しようとしたが V そのものに問題が生じている」という場合と、(ii)「V したが V のあとの結果に問題が生じている」という場合とがあるということを示した。(ii)の意味を表す同語反復述語文には、さらに「V しようとしたが程度が低い」という意味を表すものと、それ以外の意味を表すものがある。一方、(i)の意味を表す同語反復述語文の場合、V であること（もしくは V が起こったこと）を強調した上で、別の問題が生じていることを表している文であるということを述べた。

３章では、これらの意味の違いと動詞の意味分類との間に相関がないかどうかを調べ、第一種「状態動詞」・第二種「継続動詞」・第四種の動詞が 1 つの V につき(i)と(ii)の 2 種類の意味を表すことができたのに対して、第三種「瞬間動詞」は 1 つの V につき(ii)という意味しか表さないことが明らかになった。

4 章では「V ことは V(が～)」と「V には V(が～)」には大きな意味の違いがないように見えるが、「(家が)燃える」・「(事故に)遭う」など、あまり望ましくない V の場合、「V には V(が～)」は「V ことは V(が～)」に比べて、「わざと V した」「V することを望んでいる」という意味を表す傾向があるということも指摘した。最後に 5 章では、形容詞/形容動詞を同語反復した述語文についても考察した。

7. 参考文献

影山太郎(1993)『文法と語形成』東京: ひつじ書房.
影山太郎(1996)『動詞意味論』東京: くろしお出版.
金田一春彦(1950)「国語動詞の一分類」『言語研究』15: 48-63.（金田一春彦(編)(1976)『日本語動詞のアスペクト』: 5-26. 東京: むぎ書房. に所収）.
工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテクスト』東京: ひつじ書房.
前田直子(1995)「ケレドモ・ガとノニとテモ」宮島達夫・仁田義雄(編)『日本語類義表現の文法(下)』: 496-505. 東京: くろしお出版.
南不二男(1974)『現代日本語の構造』東京: 大修館書店.